

J. バーネット著

『豊富と欠乏—1815年から今日までの  
イギリスにおける食物の社会史』John Burnett, *Plenty and Want—A social history of  
diet in England from 1815 to the present day*

London, Thomas Nelson Ltd., 1966, X+296 pp.

## I

産業革命期以降のイギリスの食生活の実態については、経済史等の全体的な脈絡のなかで断片的に検討されたことはあっても、食事内容をふくむ食糧そのものに関する体系的な書物は、わたくしの知るかぎりでは、本書の刊行以前には認められない。著者自身もこのことに触れて、産業化したイギリスについて人間の基本的な必要物の変化に関する研究が、ほとんどあるいはまったくなされていないことの珍奇さを指摘している。

著者は、従来論じられて確信の域に達している食物に関するいくつかの神話を検証し、そのさい上流階級よりも労働者階級に関心の主軸をおいて考察している。語りつがれたいわゆる「飢餓の40年代」の否定など、著者の強調してやまないのは、作為によらず事実に基いての追求ということである。

本書の主要な特色と大いなる魅力は、まさに先入観にとらわれず事実に立脚して実証的に結論づけられた数々の食生活実態であり、またイギリス国民の社会改良をめざすひたむきな努力への精緻な立論構成であると言うことができよう。

## II

著者の John Burnett は、食物の変遷に関して研究をつづけてきた。現在、Brunel College の社会科学部門の長であり、London University の講師を兼ねている。

本書の構成は、第1部(1815~50年)、第2部(1850~1914年)、第3部(1914年から現在まで)に大別され、各部がさらに4ないし5章より成っている。以下、章を追ってできるだけ著者の叙述にしたがいがながら、若干のコメントをはさみつつ本書の内容の骨子を紹介してみよう。

第1部 第1章〈過渡期のイギリス〉では、まず19

世紀前半期に倍増した人口扶養の問題が論じられる。都市化現象の結果として、人口の半分は the new nation of town-dwellers として、他の半分の人々から食糧供給をおおがざるをえなかった。社会的な模倣化現象は、18世紀まではぜいたく品であった白いパンを普及させ、紅茶をすべての階級に供するようになった。しかし、1815~50年期には、消費トレンドの一般的な上昇を示す証拠はなにもない。ただし1845年以降、多くの食糧トレンドは鋭く上昇傾向をたどっている。

著者は、それ以前にくらべて「飢餓の40年代」といわれるような“hungrier”な事実は論証できないことを述べ、本書においては、実在しない“average”な消費者ではなく real people について議論すべきことを主張している。

第2章〈農業労働者〉では、かれらの劣悪な食生活が論じられる。かれらの食糧はその総生活水準に依拠し、総生活水準は逆に農業経済の諸状況に依るものであった。そして、かれら自身は、その食糧についていわば無為無策を余儀なくされたのである。かつてはミート・パイやプディングなどさまざまな食料を自分の口にしえたかれらが、一転して市場に供給される食糧づくりにおわれることになった。救貧法等も無力で、わずか一世代のあいだに farm servant は day labourer にかわり、さらに pauper へと転じた。Sir Frederic Eden がはじめて指摘したように、かれらの生活水準は家族数や地域によって均一ではなかったが、総じて言えば、かれらには最低の食生活費のおよそ半額しか稼得がなかったのである。

“meat”は塩づけのポークかベーコンのみを意味し、週1回以上食べる家庭はまれだったのである。

つづく第3章〈都市労働者〉では、食糧問題で穀物・肉類・乳製品の減少を結論した E. J. Hobsbawm とその逆の結論に達した R. M. Hartwell の最近の研究に触れ、かれらは1人当りの消費量について論じているのみで、

real people の actual diet を考察していないと批判している。

著者はこの時期の賃労働について、単一の“working class”を想定するには、賃銀額が個々にまた時期的にあまりにも幅がありすぎる点を強調する。雇用・不況・物価が食生活に大きくからんでいた。1831年の工場法に関する Sadler 委員会の証言は、工場児童の食生活の悲惨さを明らかにした。

労働者世帯家計は、植字工のような水準では肉類・地代・衣料・教育等に支出のウェイトがみられ、手編み工のような水準では poverty-line diet を直感させる数値をみることができる。貧困家庭ほど安価な炭水化物を求め、たん白質への依存度は低いことが証明された。

1848年、繁榮がとりもどされたこの年こそが、飢饉の半世紀に一応の終止符をマークしたのである。

第4章〈富裕者の食物〉では、産業革命による“the rich and the poor”間の断層をさぐっている。1850年以前には、土地貴族が“upper class”としてなお絶大な勢力をもち、くわえて資本家としての製造業者が“middle class”として参画をはじめていた。かれら“new rich”は精力的に上流社会への参入を企図した。フランス風の好み次第にとり入れられ、大量の肉類消費にくわえて鮮魚も食卓に供せられた。ディナー・パーティには料理の品数もふえシェリー酒やシャンペンもくわわった。Victoria 女王のためのそれなどは肝をつぶすほどに盛大であった。

明らかに、今日よりも当時の食欲は旺盛だったのである。そしてそれゆえに、著者はこう述べている——「富裕と貧困のコントラストを、食物以上にあざやかに示すものはない。1850年には、住居・衣服・立ち居ふるまいは収入テストとしてはなお誤ることがありえた。しかし、1人の人間のディナー・テーブルは、またたくうちにこの世におけるその人間の生活水準を詳細に告げてくれる。『君がなにを食べているか話してみたまえ』と Brillat-Savarin は言った。『そうしたら、わたしは君が何者であるかを話せる』」(p. 71.)。

第1部さいごの第5章〈食物の不純化〉では、19世紀前半期の未曾有の食物不純化の一般的流行を摘出している。著者は、その根元の一つとして食物の生産者と消費者とを断絶させた都市生活を挙げる。都市化現象とともに、パン原料にみようばんが混入され、有害な色素で染められた紅茶が出まわった。

都市化や産業化とならんで、自由競争を前提として国家の役割りが変わったという認識が、food control を放棄

させたことも不純化の大きな要因となった。大衆は不純化の事実をほとんど知らず安価なものにとびついた。健康を害し栄養を低下させ、さらには middle class の道徳的退廃を招いた食物の不純化は、1870年代に効果ある立法が成立するまで、大手をふってイギリス全土をまかりとおっていたのである。

### III

第2部 第6章〈生活水準〉では、賃銀と物価・食糧消費と支出・食糧供給・食品産業・食品の小売りについて論じている。“The Golden Age”, “Great Depression”をへて富の再配分期にいたる1850年以降は、全体的には実質賃銀に若干の改善がくわえられ、poverty 段階からは一段階上ったが、豊かさとはなおはるかにへだたったままであった。

第1次大戦まえには肉類の消費が増大し、馬鈴薯とパンの消費は減った。パンの消費低下は生活水準の上昇と広義において結びつく現象であった。そして、食料品価格の低下が、消費増大の主原因の一つであった。

19世紀後半の急激な人口増加は、輸入食糧への依存度を高めた。1914年までに穀物の4分の3を輸入し、食肉も冷凍技術の進歩とあいまって大量に入ってきた。「安価で良質の輸入食肉は、労働者階級の食事に一種の革命をおこした」(p. 101.)。また、19世紀末にはかつては小規模であった食品産業が大規模かつ機械化され“industrial revolution”のさいごをかざる主要産業にまで成長したのであった。

食品小売り業の発展や包装食品の発売も19世紀末の一特色で、リプトンやライオンズ紅茶もパッケージ・ティとして売出された。

第7章〈イギリスの農村地域——その虚構と現実〉では、地方労働者の周期的な貧困と欠乏の状態が描写される。死なない程度の生活は、救貧法や教育法によっても向上せず脱農化現象が引きつづいた。1863年の Edward Smith 博士の調査でも、肉類はなおぜいたく品あつかいであったことがわかる。こうした事情は、第1次大戦前夜にもほとんど同じで、かの Seebohm Rowntree は食物の栄養価が1人の人間のたんに“moderate”な労働のための必要最低限にも達していないことを明らかにした。減食(under-feeding)は1914年においても労働者大多数の宿命であり、肉類は一家において“for the man only”であった。国民体位の低下が、開戦とともに社会問題化したのも当然の成りゆきであった。

第8章〈イギリスの都会地——その貧困と進歩〉では、

都市労働者の漸進的な生活向上の若干の局面を叙述している。19世紀後半は一般的には労働者の快適さの水準は上昇した。しかし、夫が最高の食事をとり妻や子は劣ったものでまんするという食生活は存続していた。地方農村にくらべての利点は、小売り店間の競争の激しさから食料品価格が割安でしかも少量買いができたということであった。大道商人も安くて新規な食料品を供して労働者の食事にいろどりをそえる役割りをした。

19世紀の最終四半期以降、労働者階級の食事水準は目立って向上した。1902年の調査では、肉類消費量は40年まえより倍増した。にもかかわらず、かのCharles Boothの調査からも明らかなように貧困の解消にはほどとおかった。Londonでは69.3%の“in comfort”とともに30.7%の“in poverty”がみられた。著者も述べるように“working-class pattern”が存在するのではなくて、労働者階級内部に大きなへだたりが存在したのである。

つぎに第9章〈高級な生活〉では、土地貴族と結びついて一団となった新興勢力たるmiddle classesの食生活等が告げられる。かれらのディナー・パーティは仕事と快楽とを結びつけるものであった。Buckingham宮殿のディナーは豪華をきわめ、土地貴族らより成る最高の社交界の食事習慣は王室の例に酷似したものであった。しかし、大戦まえまでにはディナーは簡素化され過大な肉類消費は新栄養知識にうらづけられた野菜等にかわっていった。

〈食物の品質〉に関する第10章では、1850年代の食品不純化・自発的改良・初期の食品規制立法・純良食品の創出について論及されている。存続していた不純食品に対して業者による自発的な改良が立法の先駆をなし、また医師たちのキャンペーンも一つの威力となった。妥協の所産として最初のAdulteration of Foods Actが1860年に通過し、さらに1872年の改正法をへて効力あるSale of Food and Drugs Actが1875年に成立した。マーガリン・バター・ミルクなど広範な飲食物が、1914年までにstatutory standard下に入った。パン・紅茶・ビールなど、安心して摂取しうる時期がようやく到来した。

#### IV

第3部 第11章〈第1次世界大戦〉では、戦時下の食生活、なかんずく食糧確保について述べられている。銃前・銃後を問わず食事は従来よりも高い水準を維持しえた。1916年、Food Departmentが商務省に設けられ

た。

イギリスの食糧配給制には、供給の確保・公正な分配・可能なかぎりの低価格維持という主要な3目的があった。そしてこれらは大過なく達せられたのである。食糧統制とならんで雇用の増大と安定で、労働者の収入が増えたことも大戦間にかえって生活水準が改善されたという逆説の大きな要因をなしていた。

第12章〈大戦間期〉では、増大した購買力によるバター等の保健食品の消費増加・輸入食糧への依存率の増進・砂糖精製等の大規模経営体の誕生・食品小売り業の発展・ブランド商品の流通・外食習慣の普及・上流階級の食事の簡素化等が概説される。1930年代の“average” dietは以前よりも“better”かつ“cheaper”ではあったが、所得格差は厳存していた。1936年2月、The Timesは「人口の半数は不十分な食事あるいは不十分な保健のままに暮している」と述べ、John Boyd Orrは1939年にもなお人口の3分の1は水準以下の食事に甘んじていると結論づけた。

第13章〈第2次世界大戦〉では、皮肉にも1940年代の戦中・戦後の苦難の時期にまたしても食事の改善がなされたことを告げる。今次大戦下の食糧統制は①国内農業振興による輸入食糧の半減、②Ministry of Foodの開戦と同時の設立、③栄養科学に立脚した合理的な配給政策の樹立により、前大戦時よりも多くの面で容易に行われた。価格騰貴も問題化せず、完全雇用と着実な賃銀上昇と食糧統制は、かの低水準におかれた人口の3分の1を占める人々の生活水準をも目にみえて向上させたのである。

最後の第14章〈1945年以降〉では、富裕者と貧困者とのギャップの縮小化傾向を指摘している。インフレ・景気後退・労働争議にもかかわらず生活費の伸びをこえて賃銀上昇がつづいたことは、“working class”と“middle class”との区分を困難にしてきたと著者は言う。

1953年にすべての食糧統制は撤廃された。パン・肉類・バター・鮮魚は今次大戦以前よりも消費量が低下し、一方、とり肉・卵・野菜・果実の消費量は増大している。食事は軽くてかさばらず、しかも栄養ゆたかなものになっていると言えよう。しかしながら、不純食品は現存している。食料添加物の“permitted”と“prohibited”の限界は、新しい科学知識とともにきわめて流動的なことを銘記すべきであろう。

著者Burnettは、食事・食料に関する研究の長きにわたる無視をあらためて嘆息しつつその叙述を閉じている。

V

歴史的叙述の骨子のみを収約することは、しばしば原著の説得力を減殺することになる。本書の紹介にさいしても、わたくしはこの点にすくなからぬ危惧の念をいだいている。

それはさておき、以下に若干の読後感をしるして責を果したい。最大のコメントは上述の原著紹介それ自体である。原著においてわたくしが問題を感じた部分がそこにしるされているからである。いささかそれを敷衍すれば、つぎのとおりである。

(1)産業革命研究に関する「悲観説」・「楽観説」には流動的要素がすくないが、著者は前説に傾斜しつつも独自の生活水準像の設定に努力している。しかし、食生活が全生活要素と有効に結びついて検討されていないのでその成果はなお十分とは言いがたいところにとどまっているようである。

(2)著者の想定する階級構成は、階級間および階級内の両面にわたって十分な説得力をもつものとは言いがたい。食生活水準の近似化傾向のみをもって階級間格差の縮小や階級そのものの区分の不鮮明化を論ずることは納得で

きないものを感じる。

(3)戦時食糧政策と国家の戦争政策全体との結びつきの解明が欠落している。総力戦期における国家意図の明確な抽出なしに独立して食糧政策を論ずることは、戦時経済政策の無批判な美化に通ずる危険性が絶無ではないように考えられる。

(4)総じて経済的視角からの分析が十分に深くなく、流通機構の問題にかぎってみても分析が平板かつ安易にながれているきらいがある。蓄積された経済史研究の成果が、有効に活用されることを期待したい。

(5)以上のような注文にもかかわらず、綿密な食事・食料・食生活の分析は、得がたい第1次資料等の駆使によって従来のイギリス研究の空白をみたくすものと言えよう。昭和42年2~3月、病菌ブタ問題等に不安感をあおられたわれわれにとっては、不純食品についての著者の深い造詣は、とくに切実な問題提起として受けとめられた。イギリス社会改良の一環を形成すべき食生活水準改善をふくむ食糧問題について著者 Burnett 博士のいっそうの研鑽を念じたい。

(石畑良太郎 東洋大学助教授)

— 執 筆 者 紹 介 —

お 小	くら 倉	じょう 襄	じ 二	同志社大学教授
こ 小	ねま 沼		たけし 正	社会保障研究所所員
た 田	しろ 代	ま 末	じ 二	東北大学教授
な 平		こう 恒	じ 次	カリフォルニア、フタソフォード大学客員教授
や 山	くち 口	しん 新	いち 一	厚生省大臣官房会計課課長補佐
や 山	だ 田	ゆう 雄	さう 三	社会保障研究所長
こ 小	やま 山	みち 路	お 男	横浜市立大学教授・社会保障研究所専門委員
た 谷		はら 昌	つね 恒	社会保障研究所所員
み 三	うら 浦	ぶん 文	お 夫	社会保障研究所所員